



# IUFRD NEWS

No. 83 (2004.12)

## ユフロ第43回ソウル理事会

東京大学 鈴木和夫

ユフロ第43回理事会が、平成16年10月10日～16日に、韓国で開催された。2005年にオーストラリア・ブリスベンで開催される第22回ユフロ世界大会についての最終確認と、次期（2006～2010年）ユフロ体制を決定する理事会であった。

10月10日（日）、前日の台風22号の影響を受けて大幅に遅れて成田空港を出発した飛行機は、約1時間半ほどでインチェン空港に着いた。いつものように到着ロビーの出迎えの案内を見廻したが見当たらなかったため、予定より2時間以上も送られて着いたことや、会場のソウル大学の勝手を知っていることから、早々に市内行きのリムジンバスに乗り込んだ。ソウル大学ホームファカルティクラブに着くと、暫くして空港で待っていたというソウル大学スタッフに声を掛けられた。実のところ、会議直前におびたらしい数の添付ファイルを付けたEメールが送られてきて、その中に空港での待合場所が記されていたのであった。すっかり失念して申し訳ないと思っただけ、メールをプリントするだけでも数百ページあり、目を通すだけでも相当の時間を要するこのような連絡の取り方は、時間にゆとりのある人には適した方法とはいえ、あまりにも一方的過ぎると日頃感じている。事務的連絡に添付ファイルを付けないように要請しても、送る側にとってみるとこれほど便利な方法はないので、受け入れてくれる可能性はほとんどないのが実情である。

10月10日にCSC (Congress Scientific Committee),

11日にSC (Science Committee) とPC (Policy Committee), さらにSPDC-AG (SPDC Advisory Group), 12日に国際シンポジウム, 13日と14日に拡大理事会 (Enlarged Board Meeting) が開催され、続いて14日～16日にエクスカッションが予定された。

今回の拡大理事会参加者は、後で述べる米国連邦政府および州政府の職員の職務専念義務の関係もあって少なく、とくに同伴者は数えるほどしかいなかった。会長、副会長、前会長ら夫人の姿は無く、また、私もはじめて同伴しなかったこともあって、レセプションは従前とは異なりすっかり男社会の様相を呈していた（写真-1）。



写真-1 ソウル大学ファカルティクラブ前のユフロ拡大理事会参加者（10月12日）

## SC (Science Committee) 委員会

11日に開催されたSCはブリスベン世界大会の運営について最終決定する場であった。ジョン・イネス（カナダ・UBC教授）を座長として議事は手際良く進められた。ジョンは、能力と実行力の点から、また英国が母国であり言語の点からも、次期ユフロ会長に最適であると個人的には感じていたが、若過ぎるとの意見があり次期副会長に予定されている。世界大会の詳細はいずれ世界大会パッケージをご覧頂くとして、会議の一端を紹介すると、基調講演の3名はすでに決まっているが未決の講演者を誰にするか（パッケージ印刷の関係で今月29日がデッドライン）、サブプレナリーの講演者は米国人が多過ぎないか、テクニカルセッションでは女性の講演を2割以上にすること、1頭発表を減らしポスター発表を増やすこと、ベストポスター賞を準備すること、各部会のビジネスミーティングは最終日の同じ時刻に行うこと、などであった。とくに、前報（IUFRO-J NEWS 80, ユフロ第42回ケベック理事会, 2003.12）でも触れたように、世界大会運営で大きく変わった点はポスターセッションであった。クアラルンプール大会ではユフロにおける論文発表の質の向上を目指して発表申し込みの事前の取捨選択がきびしく行われたが、ブリスベン大会では参加者の拡大を目指して数多くのポスター発表を歓迎することとなった。このような方針の変更は、昨年の世界林業会議にみられるように、開かれた森林研究のあり方と社会における森林の意義という観点からも妥当なものといえる。会議では、“Door open to IUFRO”との表現がとられた。COC (Congress Organizing Committee) 委員長のゲリー・ペーコン（クウィーンズランド・オーストラリア）は、ブリスベン大会の会場は広いので何千のポスターでも受け入れますよ、と笑い飛ばしていた。現在、申し込みは91カ国から1,682講演に達し、申し込みの多い国は順に、米国、インド、オーストラリア、ドイツと100以上を超え、フィンランド、ブラジル、スウェーデンと続いた。クアラルンプール大会では最大であった日本は？との質問や、参加申し込みが著しく少ないロシアと中国が懸念され、今後の対応が検討されることとなった。

## SPDC-AG (Special Programme for Developing Countries-Advisory Group)

現在活動しているSPDC Projectは、GFIS (Global Forest Information Service) Africa Project (European Commissionの支援), Preparing and Writing Research Proposals (ドイツの支援), Training in Forest Policy (ド

イツの支援), BIO-REFOR (日本の支援), SAP (Scientist Assistance Programme) (ユフロの支援) などである。しかし、日本の援助が激減したことから、また主要国に対する支援要請はほとんどが悲観的であることから資金繰りが行き詰まっている。因みに、2003年の収入は、日本77,726、米国26,143、ドイツ13,741、その他606、合計118,216ユーロである。日本からの支援は今年から打ち切れ、コーディネータも今年12月で任期を迎え、SPDCの活動は資金繰り次第の成り行きとなった。

## 国際シンポジウム “Forest Research and Education for the 21st Century”

12日は国際シンポジウム “Forest Research and Education for the 21st Century” が、韓国の森林研究所、林学会、ソウル大学の共催で開催された。昨年、木平勇吉教授（日本大学）が参加したプレシンポジウム “アジアにおける森林教育と研究” を引き継いだものであると同時に、今回のユフロ理事会を利用して、韓国山林庁、森林研究所、ソウル大学などの関係者に懇談の場を提供するものでもあった。講演は、英国、ドイツ、オーストリア、フィンランド、スウェーデン、デンマーク、チェコ、スロバキア、南アフリカ、カナダ、ブラジル、オーストラリア、ロシア、フィリピン、日本、マレーシア、韓国の順で、ほとんどがユフロ理事会参加者の講演であった（写真-2）。講演内容は予想されるように各国ともほとんど同じで、今後他分野との交流や他産業との協調



写真-2 教育文化センターで開催された国際シンポジウム開会式のドン・リー教授の挨拶（上）と筆者の講演の様子（下）（10月12日）

が教育研究に欠かすことができないというもので、金太郎飴のようであった。私は、松野はざまに始まる日本の林学の黎明期の推移と、2001年に日本学術会議が答申した「森林の多面的機能の評価」の必要性について述べた。参加者の関心は、日本の黎明期の林学教育にあったようだ。

#### 第43回理事会

13日・14日に第43回ユフロ理事会が開催された(写真-3)。開会の冒頭に、自動車事故で亡くなられた名誉会員ハワード・クリーベル教授(元第2部会長、米国)に哀悼の意が表された。私には、日本最良のクリーベル教授の優しい人柄と、コスタリカ理事会の折りのラフティングで骨折して帰国した同夫人のことなどが思い出された。

続いて、リチャード・ガルディン(米国森林局)から9月に施行された米国連邦政府および州政府職員の職務専念義務の法律、すなわち、州政府職員は一切他の仕事を兼業してはならないこと、連邦政府職員は国際機関への奉仕は認められるものの役職についてはならない(no responsibility)こと、について説明があった。したがって、ユフロ理事会で投票権をもつGM(General Member)やDC(Division Coordinator)は辞任するというものであった。しかし、任期を間近に控えて突然交代するのは混乱を招くので、DC(部会長)はDDC(副部会長)に降格して急場を凌ぐこととなった。

理事会における議題は例によって多数あり、とくに新たに話題に上った事項について記すと、ユフロ活動の公開性を高めるためにワークショップ開催には1ページサマリーの事務局長提出を義務づけてWEB上に掲載しネットワークの充実を計ること、タスクホース委員会ではポリティカルなテーマ(Forest Law Governanceなど)は扱わないこと、ジャック・マイナイ(元IFF・カナダ)によりユフロのレビューが行われ(写真-4)ユフロではScience, Research, Policyの識別の必要性が指摘されたこと、などであった。また、わが国からのIUFRO Annual Report 2003への資金援助に対して感謝の意が再三表された。

多くの関心を集めた2010年世界大会の開催地は、当初、ロシア、ブラジル、南アフリカ、韓国の4カ国が候補国に上ったが、選考委員会における選考の結果、南アフリカと韓国の2カ国が推薦された。南アフリカはダーバン開催で、アフリカ最初のユフロ世界大会であること、2010年にはワールドカップサッカーが開催されることからさらに環境の充実が計られることなどをアピールし



写真-3 ソウル大学コンベンションセンターで開催された第43回ユフロ拡大理事会の様子(10月13日) 米国からの参加が少なく、例年になく少人数の拡大理事会

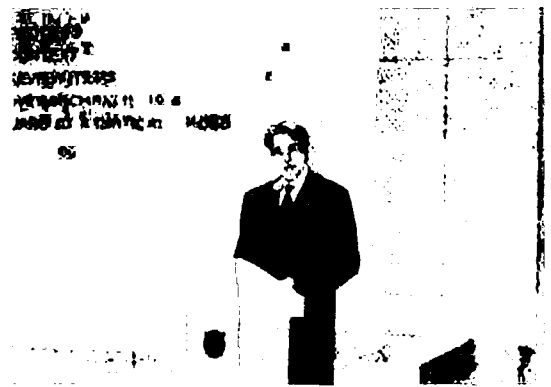


写真-4 ケベックで開催された世界林業会議(2003年)でも顔馴染みのマイナイ氏によるユフロ活動のレビュー(10月13日)

た。韓国はソウル開催で、すべての条件が整っていること、資金として150万米ドルを準備することなどを強調した。その後、理事会メンバーによる投票(投票権は、会長(1)・副会長(2)・事務局長(1)、GM(10)、DC(8)の合計22名に与えられるが、出席は17名であった)の結果、11:6で韓国ソウルに決定した。韓国の理事会メンバーに対するもてなしは十分に功を奏したようであった。

翌日14日には、表彰委員会による各賞受賞者の候補が推薦された。SAA(Scientific Achievement Awards)は、米国5名、カナダ2名、オーストラリア1名の8名で、北米に偏っていた。わが国からも推薦されたが、残念ながら得票が及ばなかった。受賞者は10名以内とされて

いることから9位以降の同点者4名についての判断は持ち越された。

SPDCの報告では、2004年12月にはコーディネータの任期を迎えることが紹介された。資金繰りの関係で、今後後任のコーディネータがどうなるかは成り行き次第で明らかではない。日本からの支援が如何に大きな貢献をしていたのかが分かる。

理事会の最後に、次期(2006-2010年)ユフロ体制の投票があった。会長など理事会メンバー候補者は、来年のブリスベン世界大会時に開催されるIC(International Council)で正式に承認されなければならない。理事会メンバー候補者の地理的分布をみると、アジア/日本3、中国(北京/台北)2、ロシア1、北米2、ラテンアメリカ2、ヨーロッパ8、アフリカ2、の合計20名(その他、事務局長(1)、GM(1))であった。北米の理事会メンバーは、今期は米国3、カナダ2の合計5名であったことから大幅に減少することになる。わが国からはGM1名、拡大理事DDC(Division Deputy Coordinator)2名が推薦された。私は今期でDCを交代するが、いままです事務局を入れて60名を越す拡大理事会に日本人は1人であったため、SCには出席したが同時開催のPCを傍聴することはできなかった。漸く、次期体制から両方の会議への参加が可能となり、嬉しい限りである(写真-5)。

10月14日午後、理事会終了後、ほとんどの参加者が2泊3日の済州島エクスカージョンに向かう中、私はインチェン空港へと向かい、帰国の途についた。



写真-5 投票ではお互い協力したFRIM所長ラザック氏と(10月14日)

#### おわりに

1996年から欠かさず出席した私のユフロ理事会報告も今回で一区切りとなる。21世紀に入って森林に対する社会的な関心は引き続き高く、ユフロがどのようなスタンスで今後活動するのは、わが国の森林研究とも深い関わりをもっている。2004年12月に配布される予定の第22回ユフロ世界大会パッケージ(Registration Package)をご覧頂いて、2005年8月8日~13日に開催されるブリスベン大会に多くの方々の参加をお願いすると同時に、世界大会が盛会で実りある大会になることを期待したい。

## イランで開催されたブナ・シンポジウム

北海道立林業試験場 寺澤和彦

IUFRO 研究グループ1.10.00 "Improvement and Silviculture of Beech"の主催する第7回国際ブナ・シンポジウムが、イランイスラム共和国の首都テヘランおよび北部のアルボルズ山脈(英語名はエルブルーズ山脈)周辺において、2004年5月10日から19日まで10日間にわたって開催された。「イランにブナ林を見に行く」というと「えー!イランに?ブナあるの?」とびっくりされることが多い。イランというと、乾燥した砂漠の国というイメージだろうか。たしかに北東部には砂漠が広が

っているし、首都テヘランでも年間の降水量は200mm程度である。しかし、この国の北縁部にあたるカスピ海の南岸地域には、年降水量が1,300mmほどの湿潤地域がある。ここにオリエント・ブナを含む落葉広葉樹の森林が広がっている。ユーラシア西部でのブナ属分布域の東の端に当たる。

#### シンポジウム開催までの経緯

研究グループ1.10.00 "Improvement and Silviculture of

Beech”は、1984年にヨーロッパブナの遺伝、育種、育林に関する研究者達を中心になって発足した。発足年のドイツでの研究集会を皮切りに、スロベニア（1986）、スロバキア（1988）、スペイン（1992）、デンマーク（1994）、ウクライナ（1995）と、ヨーロッパ各地で6回のシンポジウムが短い間隔で開催されたが、それ以降は研究集会が持たれず、活性がやや低下した感があった。そこで、2000年には、ヨーロッパ以外の地域のブナ研究者の参画を促進することを目的として、コーディネーター陣の交替が行われ、副コーディネーターとしてイランのKhosro Sagheb-Talebi氏（Research Institute of Forests and Rangelands）が就くことになった。今回のイランでのシンポジウム開催は、新生したこのグループの第一歩にあたるイベントということになる。

#### シンポジウムの概要

シンポジウムのホストは、イランのResearch Institute of Forests and Rangelands (RIFR)、テヘラン大学自然資源学部、そしてForest and Range Organizationである。とくに、RIFRのK. Sagheb-Talebi氏は、このシンポジウムの企画、準備から実行までを完璧に取り仕切ったキーパーソンであり、彼なくしてはこのシンポジウムはなかったといっても過言ではない。

日程は、5月10～12日が基調講演を含む口頭発表とポスターセッション、13～15日が北部のカスピ海方面へのエクスカージョン、そして17～19日が中・南部の観光都市シーラーズとイスファハンへのツアーである。参加者は、デンマーク、ドイツ、スイス、ルーマニアなどヨーロッパ4カ国から25人、日本から4人、アメリカから1人、イラン国内から約70人、合計約100人であった（写真-1）。



写真-1 ブナ・シンポジウムの参加者たち  
（エクスカージョンでのランチ後）

#### テヘランでの会議

シンポジウム前半の研究発表は、テヘラン市内の近代的な4つ星ホテルHotel Simorghで行われた。ロビーからベルシャ絨毯の敷き詰められた階段を地下2階に降りていくと、200人ほど収容可能な階段教室形式の講堂があり、そこが口頭発表の会場である。受付では、RIFRの女性スタッフ数人がにこやかに迎えてくれる（写真-2）。テヘランでの会議の運営にあたった約10人ほどのイラン人スタッフの半数以上が女性であったことには、正直驚いた。女性の社会参加の現状を示す一例かもしれない。テヘランの新聞によると、イランの修士課程修了者のうち女子学生の占める比率は40%に達したそうだ。

さて5月10日の朝、会場にコーランとイラン国歌がスピーカーから流れ、厳粛な雰囲気の中で会議が始まった。基調講演は、J-P. Schuetz氏（スイス：ETH）による中部ヨーロッパにおけるブナ優占の生態・生理的理由に関する考察と、M.R.M. Mohadjer氏（テヘラン大学）によるオリエントブナの分布と生態、施業についての紹介である。これらに加えて、R. Rogers氏（ウイスコンシン大学）が作成したパワーポイントと原稿を使って、このグループのコーディネーターP. Madsen氏（デンマーク）がアメリカブナの生態の概略を紹介した。

口頭発表のセッション構成とそれぞれの発表件数は、種子生産（3）、天然更新と植栽技術（10）、施業と成長（7）、林分構造（3）、養分動態（3）、木材の特性（2）である。本来、この研究グループは、ブナの遺伝・育種と生態・育林の両分野をカバーするグループであり、以前の研究集会では遺伝変異や産地特性などに関するセッションが組まれていたが、今回は生態と育林に関わる報告に偏ることになった。このうち、ヨーロッパブナに関する



写真-2 テヘランでの会議の運営スタッフ  
（後列左端がKhosro Sagheb-Talebi氏）

る報告が約半数を占め、その多くが単木ないし群状の択伐による更新方法に関する報告であった。これは、ヨーロッパでのブナ林の施業方法が、従来の傘伐 (Shelterwood system) から、より自然に近い (Close-to-nature) 施業方法にシフトしつつある現状を反映したものである。EUが出資するNAT-MAN (Nature-based Management of beech in Europe) と呼ばれる国際研究プロジェクトも進行している。オリエントブナに関する報告は、各地域のブナ林の構造や林分動態に関する報告が多かった。日本のブナについては、小山浩正さん (山形大学) と私が、生態や施業の概要と結実予測手法の開発と応用について2報に分けて報告した。また、紀藤典夫さん (北海道教育大学) は、花粉分析による北限域のブナの分布変遷について報告された。

遺伝的な観点からの報告は、この研究グループの創設者の一人でもある Georg von Wuehlich 氏 (ドイツ: Institute for Forest Genetics and Forest Tree Breeding) による2件の報告のみであり、ヨーロッパブナの188産地からなる産地試験の15年目の結果と、ヨーロッパブナとオリエントブナの葉の形態と分子マーカーによる遺伝的な違いに関する報告であった。

2日目のセッション終了後には、夕刻の交通ラッシュの中を40分ほど車に揺られて郊外のRIFRを訪れた。数百人規模の国立研究所であり、研究者の多くは主にヨーロッパ方面に留学経験があるようだ。英語、ドイツ語、フランス語などが堪能な人が多い。約150haの広大な植物園が併設され、イラン各地の植物が地域ごとにブロックに分けて植えられている。年降水量が200mm程度のテヘランで、ブナを始めとする湿潤地域の植物を育てるのは容易ではなく、1年の半分の期間は灌水が必要とのことであった。現在はまだ造成の途上であるが、完成の時には市民にも開放されるとのこと。排気ガスの充満するテヘラン市内に暮らす人々にとって憩いの場になることだろう。

### エクスカーショ

テヘランでの3日間の研究発表を終え、5月13日の朝から待望の2泊3日のエクスカーションに出発した。イラン北部のアルボルズ山脈の森林を見に行くツアーであり、今回のシンポジウムのハイライトともいえる。

アルボルズ山脈は、イラン北部のカスピ海の南岸に東西約800kmに渡って連なる山脈で、平均約4,000mの高さをもつ。最高峰は、富士山に似た火山ダマーヴァンド (5,671m) である。この山脈は、テヘランのある乾燥したイラン高原と、カスピ海南岸の湿潤地帯とを隔てる大

きな障壁であり、峠を境に植生が急激に変化する様子が実感できる。

テヘランからカスピ海に向かうには、テヘランの西にあるカラジという街から国道を北に向かうことになるが、峠の南側では森林らしい景観をほとんどみることができない。乾燥した気候と長年の家畜の放牧の影響だろう。家畜の放牧が約40年前に中断された場所では、土着のビャクシンが更新し、ようやく樹高5mほどに成長している (写真-3)。この辺りが原産という野生のチューリップなどがあり、植生に詳しい大住克博さん (森林総研) は大喜びしておられた。

残雪の峠を眺めながら約2,500mの峠を北側に越えると、またたく間に霧に視界を奪われ、南北での気候の違いがはっきりとわかる。斜面もほとんど森林に覆われている。石灰岩山地のイトスギ (*Cupressus*) の林などを見ながら、カスピ海に向かう。平野部まで降りていくと水田があり、ちょうど田植えの終わったばかりの棚田も見えた。この付近の年平均気温は約16℃、年降水量は約1,200mmなので、水田があっても不思議ではないのである。実際、イランの人達は米をたくさん食べる。テヘラン出発から約10時間でカスピ海に面したチャールスに到着した。宿泊はオーシャンビューのリゾートホテルだが、ややさびれた雰囲気だ。エレベータに乗るたびに喜多郎の「シルクロード」がしゃがれた音色で流れる。25年前のイスラム革命前の外国人向けのリゾートだろうか。

このカスピ海の南岸、すなわちアルボルズ山脈の北側の森林は、ヒルカニアン (Hyrcanian) 森林地帯と呼ばれ、およそ185万haの面積がある。イラン全土の森林面積が1,240万haであるから、その15%を占めることになる。垂直的には、海辺の平地から標高2,800mまでを森林が覆っている。構成する樹種は、針葉樹4属 (*Taxus*, *Juniperus*, *Thuja*, *Cupressus*) を除くと、す



写真-3 アルボルズ山脈の南側の風景 (標高1,800m付近)

べて広葉樹であり、日本の冷温帯と共通の種が多い。サワグルミやケヤキも分布する一方、カンパ類がない。オリエントブナの林は、標高800—2,000mの高さに現れる。ブナ帯は、その上と下にあるナラ類を主とする森林に挟まれた形で帯状に分布する。実際にブナ林まで上がっていくと、樹皮にコケや地衣類がたくさん着生しており、空中湿度がかなり高いことがうかがわれる。おそらくカスピ海を吹き渡ってきた風が山脈にぶつかって雲の湧く高さなのだろう。一種の雲霧林としてブナ林が成立しているのかもしれない。

エクスカーションで訪れたブナ林は、テヘラン大学の演習林などの3カ所であったが、純林状の林は少ないようだ(写真-4)。カエデ、ナラ、クマシデ類など他の広葉樹が混じっている。ブナは樹高が高く、最高で50mに達するらしい。ナラやカエデの直径3—4mもあるような巨木もみられる(写真-5)。湿潤な上に、ハリケーンやサイクロンなど熱帯低気圧の来襲がほとんどないという気候条件によるものだろう。

この地域のブナ林の更新は、林内に放牧されているヤギや羊によるグレージングの程度と(写真-6)、ギャップの大きさによって左右されているようだ。家畜の影響の強い場所は、日本で言えばシカの影響によって林床植生や下層木がすっかりなくなった森林とまったく同じイメージである。その一方で、グレージングの影響が小さいためと思われる下層植生が豊富な場所があちこちであり、そこにはブナの稚樹が密生していたりする。ただ、

大きなギャップや林縁にはイチゴ類やシダが繁茂しているので、天然林施業として更新を図る場合には、大きなギャップを作らないような択伐で行うべきだという議論が現場でなされていた。いずれにしても、森林の組成や更新は、長年の家畜放牧の影響をきわめて強く受けている。最近では、森林での放牧をなくす方向で政策的な取り組みがなされているとの説明だったが、おそらく何千年も前から続いているであろう林内放牧をやめさせるのは容易ではないように思えた。

おわりに

エクスカーションを終えてテヘランで解散した後、私たちを含む約10人が中南部へのポストコンファレンス



写真-5 ナラ (*Quercus castaneifolia*) の巨木



写真-4 アルボルズ山脈の北側のオリエントブナ林  
(標高約1,200m)



写真-6 アルボルズ山脈の森林の中に住む牧夫たちの家

のツアーに出かけ、ペルシャと呼ばれたこの国の長い歴史や、バラや詩を愛する人々の暮らしをかいま見ることができた。イラクやアフガニスタンといった戦火の取まらない国々に挟まれていることを忘れてしまうような、平和でゆったりとした時間であった。

このシンポジウムの論文集は、2004年以内にRIFRから発行される予定である。関心のある方は、RIFRやIUFROのホームページをチェックしていただければ、

いずれ案内があると思う。また、ブナの育林や遺伝・育種に関する研究者間のネットワークを強めることを目的として、この研究グループのウェブサイトの立ち上げを準備中である。

最後に、今回のシンポジウム参加に際して、IUFRO-Jの研究集会参加助成をいただいたことに対して、厚くお礼を申し上げます。

## 事務局からのお知らせ

### 1. IUFRO-J研究集会事務局・参加助成の募集について

平成18年3月までに開催されるIUFRO関連研究集会に対して事務局・参加助成を行います(参加の場合は海外に限る)。希望者は平成16年12月末日まで、規定の様式にしたがい助成申請書を提出してください。助成申請書の様式は、IUFRO-JニュースNo.82に掲載されたものをコピーするか、下記のウェブ・サイトからダウンロードしてください。<http://ss.ffpri.affrc.go.jp/labs/iufroj/jyosei.htm>

### 2. IUFRO-J 平成17年度機関代表者会議のご案内

第116回日本森林学会大会が北海道大学で2005年3月27日(日)～30日(水)の日程で開催されます。それにあわせて下記の日程で標記会議を開催致しますので、機関代表者の方々のご参加をお願い致します。

日時: 2005年3月29日(火) 11:45～12:45

場所: 北海道大学内(詳細は未定)

議題: 会務報告、会計決算報告、監査報告、事業計画案、予算案など

### 3. ユフロ世界大会(2005年8月8～13日、オーストラリア・ブリスベン)のご案内

#### (1) 大会参加登録について

12月に発行予定のIUFRO News(4/2004)で大会登録に関するお知らせが掲載されます。その中に登録様式と支払い方法の詳細の説明が示されます。なお、支払金額はすべてオーストラリア・ドル(AUD)です。

#### (2) ポスター発表申し込みについて:

2005年ユフロ世界大会にボランティアのポスター報告を希望する方は、大会科学委員会(the Congress Scientific Committee)委員長Dr. John Innes氏に2005年1月31日までにポスター報告の要約を提出してください。要約は、IUFRO公式言語(英語、フランス語、ド

イツ語、スペイン語)で書いてください。

#### 要約の書式:

1. 報告のタイトル,
2. 著者、所属、e-mail,
3. 要約(最大200語),
4. ポスター発表であることの明記,
5. 希望するセッション(大会プログラム(暫定版)参照)。

要約は次の方法で提出してください:

- ・ emailの添付ファイル(MS Word)で、Dr John Innes宛(innes@interchg.ubc.ca)
- ・ FAXで、Fax番号(+1) 604 822 9106
- ・ 郵送で、宛先 Dr John Innes  
Department of Forest Resources Management,  
University of British Columbia  
2045, 2424 Main Mall  
Vancouver, BC, V6T 1Z4  
Canada

締め切り: 2005年1月31日

なお、IUFRO世界大会に関するより新しい詳しい情報は次のウェブサイトをご参照ください。

<http://www.iufro2005.com>

IUFRO-J News No. 83	平成16年12月17日
国際森林研究機関連合-日本委員会事務局	
茨城県つくば市松の里1 森林総合研究所内	
TEL 029-873-3211 (232)	[編集・発行]